

## エコとエゴ

市川 聡

地球温暖化ブームである。地球温暖化対策といえばなんでも許される雰囲気がある。ガソリン税の暫定税率を再可決する際に、某政治家が、ガソリンが高い方が地球温暖化の防止に望ましいというようなことを言っていた。おかげで屋久島のガソリンはリッター200円に迫る勢いである。屋久島のような地方では、公共交通網が発達していないために、どうしても自動車に頼らざるを得ない現実がある。夜中まで灯りを煌々とつけ、電車、バスを走らせている都会の人間が、ガソリンが高いから自動車に乗るのを控えようと言うのとはわけが違うのだ。ガソリンが高かろうが安かろうが、買わざるを得ない生活がある。はっきりいって屋久島では、もう道路を造らなくて良いからガソリンを安くして欲しい。そもそも本気で地球温暖化防止のために自動車を走らせないことを望むのであれば、これ以上道路を造らない方がいいに決まっている。このような政治家の暴言には心底腹が立つのである。

このようにブームというのは胡散臭いものだ。マスコミが扇動するブームに乗って多くの人が同じ方向を向くのは、

なんとも気持ちの悪いものである。「草の根の軍国主義」という本は、戦前の軍国主義について草の根の国民の役割を言明している。もちろん戦前の皇民化教育や軍による強制が根底にあることは間違いないが、一方で国や軍の片棒をかついだマスコミが映画、ラジオ、新聞等を通して扇動し、これに踊らされた多くの国民が情熱を持って戦争に邁進したことが、軍国主義を確固たるものにしたことも事実である。

今から6000年くらい前にはヒプシサーマルと呼ばれる高温期があった。この時期気温が今より3℃ほど高かったといわれている。日本でも関東平野は奥深くまで水没し、浅い干潟が広がった。この浅い干潟の豊富な貝類を食べて巨大な貝塚が築かれ、豊かな縄文文化が開花した。ヒプシサーマルは最適ともいわれ、決して気候的に住みづらい時代ではなく、長く安定した縄文時代の芸術文化を生み出したのである。「森林の思考・砂漠の思考」という本によるとこの時期サハラ砂漠は緑に覆われ、インダス川流域は湿潤であったという。これは過去における歴史であり事実である。今より気温が高い世界が、一概に悪いとはいえないのだ。

もちろん気温が高くなったら縄文時代の生活に戻って豊かな



狩猟採集生活を送れば良いなど言うつもりはない。ただ地球温暖化に警鐘を鳴らす人々は、今の暮らしを守ることを目的としているのではないだろうか。ここに根本的な問題があると思う。地球温暖化をもたらしたのが他ならぬ今の暮らしだからである。現在の豊かさ、暮らしを守りたいのは現在豊かな地域に住むいわゆる先進国にすむ人々である。しょせんはエゴだと思ふ。このエゴのために世界中が巻き込まれるのは迷惑な話だ。エコにまつわるエゴは本人達が良かれと思っているだけにたちが悪い。熱帯雨林を切り開いてバイオ燃料となるトウモロコシを植える。全く本末転倒も甚だしい。なぜこのようなことがおきるのか。

屋久杉は樹齢1000年をこえる杉を言う。つまり屋久杉材の中心は1000年以上前の二酸化炭素でできていることになる。これほどまでに長く二酸化炭素を保持し続ける屋久杉は地球温暖化の防止におおいに貢献している優等生だといって環境省の先輩に胸を張ったことがある。しかし答えは驚くべきことで、屋久杉は地球温暖化の防止にとってつまり二酸化炭素の削減という意味からするとゼロ査定だということである。屋久杉はもともとあるものだから削減には繋がらないという理由である。それでは屋久杉原生林を伐採して植林をすれば地球温暖化防止に貢献していることになるのかということその通りだ。全くバカげた論理である。それで環境省が屋久島で地球温暖化対策と称して何をしたのかということ、世界遺産センターの節電のために入館者が来たら自動的に照明がつくオート点滅システムを設置したことである。屋久島の電気は水力発電であり、節電は地球温暖化とは何の関わりもない。むしろガスや石油を使うよりも電気を使う方が二酸化炭素の削減に繋がるのだ。地球温暖化ブームのおかげで地球温暖化防止のためといえ予算が付く。予算を消化し権益を確保するために予算が使われる。環境省ですらこの有様だ。既に地球温暖化防止が利権化し、金儲けの手段となってしまうから熱帯雨林を切り開いてバイオ燃料を作ることが正当化されてしまうのだ。エコをエゴするのは誠にたちが悪いのである。

地球温暖化でサンゴ礁が壊滅的な打撃を受けるというはなしがある。しかしもとも暖かい海に生育するのだから海水温が上がれば生育範囲がひろがると思えるのが素朴な考えだ。秋吉台の石灰岩は今より温暖な石炭紀、ペルム紀あたりに形成されたものである。地球温暖化の速度がこれまでの気候変動に比べて早すぎてサンゴが適応できないともいう。しかし「異常気象の正体」という本によると過去の気候変動を酸素同位体を用いて調べた結果は驚くほど早く気候は変化するという事実である。映画「デイ・アフター・トゥモロー」をご覧になっただろうか。津波のようなスピードで氷河期が都市をおおっていく映像に戦慄を覚えた方も多かったのでは。これは単なるSFではなく過去の気候変化をもとに描き出されたリアルな予測である。氷河期と温暖期の変化はスイッチのON・OFFのように劇的に切り替わるのである。問題はこのスイッチがなにかわからない点にある。この本によると本当に

怖いのは二酸化炭素の増加による気候変化が現在の気候バランスを崩すことにより氷河期スイッチが入ってしまうことだ。温暖化よりも氷河期の方がはるかに恐ろしいということは想像に難くない。いずれにせよサンゴは過去における幾度とない劇的な気候変動に耐えてきたのだ。地球温暖化によりサンゴが死滅する危機感をもって海に潜っているダイバーの日焼け止めクリームがサンゴの白化を招いているというのは何とも皮肉なことである。地球温暖化防止を叫ぶ前にもっと足下でやらねばならないことがあるのである。

地球温暖化というあまりにも大きすぎる課題は、結局のところ庶民一人一人の努力では、何ら目に見えた変化をもたらさない。どうせ成果が得られないからやったような気になっているだけで満足する。その結果、環境省が行った屋久島での節電対策のように、無意味な数字合わせに翻弄されることになる。自己満足としか思えないでないか。

どうせ自己満足、エゴであれば、もっとエゴに徹してはどうだろうか。地球温暖化防止などと目に見えない大風呂敷を広げるよりも、自分たちのためにできることを考えてはどうだろうか？

例えば東京の月ごとの最高気温をみると6月から9月まで35℃を越え、7、8月は40℃に迫る勢いである。赤道直下のブルネイでさえ最高気温が35℃をこえる日はない。最低気温の最高値を見ても東京は6月から9月まで25℃を越えるいわゆる熱帯夜がある。ブルネイでは最低気温が25℃を越える日はない。そもそも熱帯に熱帯夜など存在しないのだ。全く言いがかりも甚だしい。東京夜と呼ぶべきだろう。

これはもうどう考えても異常としか言いようがない。地球温暖化以前に足下の首都の気温を下げた方がよいのである。そのためにまずクーラーを全面的に禁止してはどうだろうか。道徳教育の必要が叫ばれる昨今、隣家に熱を吹きかけて自分の家の中だけ冷やすというこの上ない非道徳な行為は即刻禁止すべきだと思う。クーラーを禁止するだけでただちに目に見えて気温が下がると思う。

私が子供の頃にはどこの家にもクーラーなど存在しなかった。それで誰も死にはしなかった。年間平均気温で東京より4℃ほど暖かい屋久島でさえ拙宅はクーラーなしで快適な夏を過ごしている。豊かな森と水があれば気温は異常には上がらない。屋久島に住んで実感したことである。だから東京にも木を植えれば良い。首都機能を移転し、霞ヶ関の官庁街を森にするのも一案だ。そうすれば地球温暖化で年間平均気温が4℃くらい上がっても東京では快適な生活を保てるのではないだろうか。

東京の気温であれば、国内の努力で目に見えて下げることが可能である。しかも結果としてこのことも地球温暖化の対策につながることも間違いない。今のライフスタイルが招いた地球温暖化を今のライフスタイルを維持するために防止するのではなく、今のライフスタイルを変えることができるように身近な環境を根本的に変えることから始めるのである。エコをエゴするのではなくエゴをエコに転じることを積み重ねることが問題解決に繋がることを祈るのみである。

# 屋久島の正月

内室 紀子



YNAC15周年! 実にメデタイことだ。メデタイ・・・ということ、一年のなかで最もメデタク、かつウチム口の大好きな行事「お正月」についてまとめてみようと思う。なお今回記事するのは、昨年まで私が住んでいた、屋久島・宮之浦地区での正月についてである。

## 《準備に大忙し》

正月とは、「新しい1年を配る」年神さまという、異界からやってくる神様をお迎えし、祝う行事のことをいう。年神様に来てもらうことで、人々はメデタク五穀豊穡・家内安全の「新年」を迎えることができるのだ。

正月にあたっては、色々と準備が必要だ。「一年の計は元旦にあり」とあるように、良い一年をスタートするには、しかるべき礼儀をもって年神様をお迎えしたい。まずは、「今年の汚れ、今年の内」でお馴染みの大掃除だが、本来は「煤払い」といって、「年神さまをお迎えするための、お清め」に当たる。そして、お正月飾りとして、「門松」「しめ縄」「鏡餅」があげられるが、これらはすべて年神様をお迎えるアイテムだ。松には「霊が宿る」と言われており、門松



長くて、立派なしめ縄です。

は年神様が家々を訪れるための目印となる。[門松]

屋久島の門松は、「砂を詰めたタルの中に、松や切り揃えた竹を飾った」ものではなく、山から切ってきた松・ユズリハ・椎の木(もしくは竹)を束ねたものになる。その足もとに白砂をまき、椎の薪を5本立てかけて完成。家庭によってはオプションで、そこにセンリョウやマンリョウを加えたりする。

門松は、背丈を超える高さで門の両脇に建てられるが、最終的には、それをしめ縄で繋ぐ。このしめ縄を繋ぐタイミングが大切で、「31日の潮満ちる時」に行わなくてはならない。「潮満ちる時」とは、魚がたくさん上がってくる時であり、縁起が良いとされている。[しめ縄]

「しめ縄」は、神社で普段見かける。これは俗域との境界を縄で線引きして、その内側が神聖な場であることを意味している。つまり、家にしめ縄を張ることは、悪霊が入ってこないようにして、そこに年神様を迎えるに相応しい神域を作りだしているのだ。[鏡餅]

そして「鏡餅」は、訪れた年神様へのお供え物となる。歳末の忙しい間を縫って行われる、昔ながらの餅つきは、友人・ご近所が集まるとあってなかなか賑やかなひと時となる。出来上がった鏡餅は、ウラジロ・ユズリハを下に敷き、ダイダイをてっぺんに飾る。これらのものは、「後ろ暗いことがない」・「子孫繁栄」・「一族が代々譲られてゆく」と諸説あるものの、その姿や語呂が縁起良しとされている。そして鏡餅は、神棚はもちろんのこと、玄關・勉強机など色々なところにお供えする。だが、あんまり供えすぎると正月が明けた後が大変。お供えしている間にどうしてもカビがつかってしまったカピカピ乾燥モチを料理するのは非常に大変なのだ。こんな具合に正月準備は、連日続く忘年

会を切り抜け、仕事納めの後、一気に進めなければならぬため、物凄く忙しい。ところが、29日は「二重苦」で縁起が悪いから、正月の準備をしてはいけないため、さらに大忙しになってしまう。

## 《大晦日が大事》

そんなこんなで、家中を靄い清め、縁起物尽くしな神域を整えて大晦日を迎えるわけだが、屋久島ではこの日を「トシノバン(年の晩)」と呼び、非常に重要視している。家族全員が揃い、「トイザカナ(年肴)」と呼ばれる膳が一人ずつ用意される。

家長はこの夜に「お年玉」を家族に配る。お年玉は今でこそ、子供の臨時お小遣いのようになっているが本来の意味は、呼んで字のごとく、「年の魂(たま)」であり、新しい1年をさす。そして昔はお金ではなく、餅を配っていた。年玉をもらわないと、正月は明けないのだ。

そしてこの日はワタクシ、ウチム口が正月の中でも特に好きな行事が宮之浦地区限定で行われる。なんと、宮之浦では年神さまがちゃんとやってくるのだ。[トイノカンサマ]

「トイノカンサマ(年の神様)」と呼ばれる神様が山からやってきて、子供がいる家々を訪れ新年の年餅を配ってくれる。しかし、このカンサマがなかなか厳しい方で、ただでは年をくれない。

一斗缶をバンバン鳴らしながら、トイノカンサマはやって来る。悪い子を山へ連れていくための背負子を背負ったカンサマ、手に鎌を持つカンサマ・・・髪も顔も真っ白で、もう神様なのか鬼なのか分からないような形相だ。そしてカンサマが椎の大枝などで家の戸をバシバシ叩くと、静粛に扉が開く。すると、そこにはとても緊張した面持ちの子供たちが正座をしてカンサマをお迎えしている。





カンサマがやってきた!

さあここから、カンサマの大お説教が始まる。荒ぶる声で、子供たちが今年してかした数々の悪行を嗜めるのである。実は、トイノカンサマに来てほしい家庭は、前もってカンサマに扮する人になんと(!)我が子の悪行をチクっているのだ。子供たちにとっては、その場しのぎのいい子が通用しないから、さあ大変。背負子で山に連れて行かれないように、平にひら〜に一年の反省を行う。怖さのあまり、泣き出す子供も少なくない。

そして年が越せないかもという窮地に陥った子供たちに「ま、カンサマ。この子は実はいい子なんです。」なんて具合に、親が救いの手を差し伸べる。自分たちがカンサマに説教してくれと頼んでおきながら、実に美味しいトコロを持ってゆく。

親の仲介が入り、カンサマの大説教はひと段落尽く(ここで、真の悪ガキは近所のばーさまから「カンサマ、まだ甘い」と野次を飛ばされ、もうラウンド怒られなくてはいけない)。そして、新年は良い子で過ごす約束をカンサマと交わし、子供たちは無事年餅を手にするのである。「もし悪い事をしたら、山からちゃんと見てるからな!」と言い残し、トイノカンサマは去ってゆく。

さて、この「トイノカンサマ」だが、なぜ宮之浦地区限定の行事なのかは、ナゾである。昔は、永田集落でもあったというから、各地に一度は伝わったものの、宮之浦だけに定着したのかもしれない。鹿児島島の西側に甌島(こしきじま)という人口約8,000人ほどの島がある。ここでは国指定の重要無形民俗文化財になっている「トシドン」という大晦日行事がある。トシドンと呼ばれる年神さまが大晦日の晩に首なし馬に乗ってやってくる。鬼の様な面をつけたトシドンは、子供のいる家々をまわってまさに屋久島のトイノカンサマと同じようなことをするのだ。この島は1886年に連続する台風の影響で大飢饉に陥ってしまい、県の政策のもと周辺地区へ大量移民が進められたことがある。人の移動とともに、種子島のある地区にはトシドンが伝わっている。屋久島のトイノカンサマも、甌島からのトシドンが伝わったものだという

説もあるが、残念ながらそれを裏付けるための資料を見つけることが私にはできなかった。

### 〈正月は一気に明ける〉

大事な年越しを無事終えると、正月がやってくる。元旦は、火の神様をお休みさせるといふことで、火を焚かない家もある。そして親戚の家に挨拶にまわったりするぐらいで、意外なほど静かに過ごす。正月は、年神さまという霊的なものと家族が交わる期間なので、不用意な外出はあまりしない。バーゲンなどに出かけている場合ではないのだ。・・・と言いたいところだが、正月も2日にもなれば各地で「初漁」や「初商い」があったりして、過ごし方も様々である。

### 〔七草〕

その正月が明けるのが、1月7日。「人日の節句」とも言われ、お馴染みの「七草粥」の日だ。正月のご馳走で疲れた胃を整えつつ、新しく芽吹いた菜を食べることでそのみずみずしいエネルギーを身体に取り込む。

そして屋久島ではこの日、数え七つになる子供が七軒の家々に七草粥を貰って周る。そうやって集めたお粥を食べた子供は、病気をしないとされる。子供が無事7つを迎えたことを祝い、これからの健康を祈って新年のエネルギーを皆が少しずつその子どもに分けてやり、厄払いを行うのだ。さらに、神社の厄除け祭に参列する子供も多くなる。屋久島では七・五・三行事の代わりにこの「七つ子の七草粥」が行われる。

### 〔鬼火焚き〕

そして、午後からは広場にお正月飾りを集めていっせいに燃やす、「鬼火焚き」が行われる。寒空の下、鬼の絵が爆竹を激しく鳴らしながら燃え尽きてゆく様は、まさに「悪霊退散」的な雰囲気を感じさせている。この時の燃え残りを家に持って帰って、家の



燃え尽きてゆく鬼を、見守る家族たち。

竈などで燃やすとさらに無病息災の厄除け効果が高まると言われている。午前中にお粥を貰いまくった7つの子は、おじいちゃんなどに編んでもらった藁の縄を持参して、鬼の絵をぶら下げている竹に結びつけ、一緒に燃やす。そして、藁の燃え残りを同じように持ち帰り、竈で燃やす。



爆竹音に負けじと、必死です。

### 〔門周り〕

鬼火焚きで正月飾りを片付けて一段落といきたいところだが、この日はもう一行事控えている。「祝い申そう」もしくは「門回り」といって、夕方頃から子ども会や青年団らが、「祝い歌」を家々に歌い周ってくる。玄関口に立った子供たちが、「イヲウテモイデスカ?(祝ってもいいですか?)」と尋ねてくるので、喪中の家でなければ「イヲウテクダサイ。(祝ってください。)」と返してやる。すると、皆で「祝うて申す〜♪」と今年の門松は立派だったとか米が一石どとか、とにかく縁起の良い言葉がたっぷり詰まった歌を歌ってくれる。さらに、青年団は、井戸のある家には「汲んでも、汲んでも、つきはせぬ〜♪」といった2番歌を、船を所有する家には「宝一艘積み込んで〜♪」という3番歌を加えて歌ってやる。要は、年神が去り、鬼火焚きでしめ縄という結界がなくなった家々に、まずは縁起の良い言葉を家に送り込んで、厄払いをしてやるのだ。

この行事は、お隣の種子島でも行われており、「福祭文(くさいもん)」と呼ばれている。もともとは、江戸時代末期から明治にかけて江戸や大阪、京都など行われていた「門付け芸」が、種子島そして屋久島に伝わってきたのだと言われている。門付け芸人は、家々を回って米や金をもらう代わりに、その家の厄を背負っていく人のことだ。中国でも正月に、楽団たちが演奏をして銭や贈り物を乞うたり、乞食たちがめでたい事を唱えながら家々を訪ね歩いたりする地方があるというのが、実に興味深い。

ちなみに、この日に数え42歳になる厄年男、33歳になる厄年女も厄払いを行う。夜辺りが暗くなってから、十字路に現れてなんと銭をばら撒くのだ。この金額は人によって違うが、4200円とか42000円とか、「42」(女性は33)

に関わる金額をとにかくばら撒く。後ろ向きに、お金を投げたら、振り向かずに家路につく。このお金は、子供たちが拾うのだが「厄のついた金」であるから、家には決して上げずに使い切らなくてはならないとされている。年明け早々、汚れを持ち込んで帰っては困るのである。

そしてこの厄だが、どうやら金品と交換ができるようだ。門付け芸人にしても、この十字路に銭をばら撒くのもまさにそうだし、考えて見れば、神社の厄払いもお布施と交換に行われる。「わが子の七草の祝いだ」といって、近所の者を集めて大宴会を催す主がたまにいる。この大判振る舞いが実は曲者で、厄年の主がそうやって豪華な食事と引き換えに、自分の厄を近所の人に少しずつ持ち出してもらおうという厄落としがこっそり行われていることもある。「タダより高いものはない」とは、正にこのこと。

そんなこんなで、この日は今までの静寂を破るかのよう、一気に賑わいを取り戻し、心も体も現実世界へと戻ってゆくのだ。



玄関口で祈っています。

### 〈まとめ〉

このように屋久島の正月を見ると、「祓い清め、縁起を担ぎまくる年末」→「年神を迎えての年越し祭」→「厄払いの正月明け」という、大きな流れがあるようだ。

### 〔年神とは〕

年神のような訪れ神は、「まれびと」と呼ばれ、異界から時を定めて来訪し、人々に祝福と豊穡を授ける霊的存在である。このまれびとは、「礼儀をもってお迎えすれ

ば祝福するし、逆に無礼だと祟る」という諸刃の面を持っている。だからこそ、年末の祓い清めや縁起かつぎが重要になる。

縁起かつぎとは、類感呪術という「類似したものは、感じあって実現する」という考え方。つまり、いいことが起きて欲しいときは、いいものをあらかじめセットしておいて呼び寄せるというものだ。家中を清めて縁起のよいもので埋めつくすのは、礼儀を持って年神を迎え、それにより豊かな一年を呼び寄せようという人々の願いなのだ。

そして年神は、豊穡の神と同時に家族を守る祖霊でもある。本来の正月は、8月のお盆と同じで先祖の魂を祀る行事であった。この先祖の魂が還ってくる時に、悪い霊もついてくると考えられおり、楠川集落ではお盆中は「施餓鬼棚(せがきだな)」といって、そういった行き場を失った霊が集まるためのお供え棚を前もって用意して、家へ上がりこまないようにしている。

だからこそ、年神様以外のもの上がりこまないよう、しめ縄が必要となってくるし、正月明けの7日がそういった先祖の魂を送り出す日と考えられるのだ。鬼火焚きはひよっとしたら、巨大な送り火なのかもしれない。そして、しめ縄という結界が外され、いわゆるニュートラルな状態になった家に、悪霊が上がりこまないように「門回り」という厄払いが行われるのであろう。何事も始まりが肝心。大事な一年の始まりだからこそ、徹底した厄払いを行っておきたいのが、心情というものか。

### 〔最後に〕

屋久島の正月は特別なものではなく、日本各地で見ることができた風景であった。今回は宮之浦地区の正月を紹介したが、同じ屋久島でも、集落によってこの正月行事も様々である。門回りの歌などは、集落によって歌詞もメロディーも幾分違っており、物は伝わるごとに変化することを、この島で目の当たりにできるので面白。

「霊的な者は礼儀を持ってお迎えするが、

用事が終わったらさっさとお引取り願う」「厄は金品と交換できる」というゲンキな側面も、わかり易くて返って親しめる。

そうやって、一つ一つの行事を紐解いてゆくと、ある時は大陸との繋がりを感ぜたり、またある時は黒潮の香りが漂ったりで、ますます興味は尽きなくなる。これらの繋がりが垣間見える時、私の中でちょっとしたアイデンティティとなんともいえない安心感が生まれる。屋久島ではこれら伝統行事が比較的好く、しかも当たり前に残されているのだから、凄い。

ところが、最近屋久島でもこういった行事が軽視される話を聞くことがある。「お盆の鐘楼流しは、ゴミを流すのと一緒で環境破壊だ」と、言い出す人がいるようなのだ。ほんとうにそうだろうか? こういった伝統行事は、自身の心の安定だけでなく、家族や地域がその絆を深めるという非常に重要な役目を果たしている。これを疎かにすることは、精神性の破壊に繋がり、やがて環境も含めた現代社会の闇のように語られる大きな問題の根源に発達するのではと、心配になる。

伝統行事は、「生きていく上で欠かせない、ココロの在り方」を養ってくれるのだと、私は信じている。実際、このように、正月を丁寧に過ごす、本当に新年がみずみずしく力強いものになり、物憂く気持ちがよい。クリスマスではない私にとっては、クリスマスよりも正月の方が、ずっと楽しくて大切なイベントなのだ。

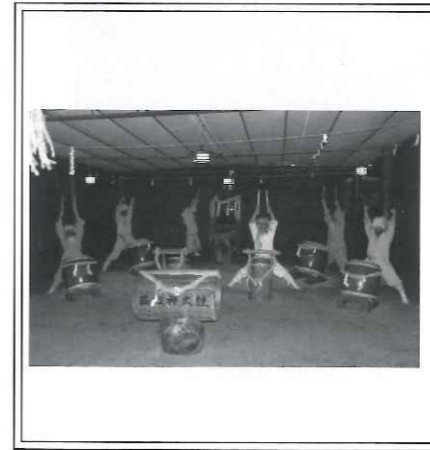
### 参考文献

- 「屋久島、もっと知りたい〜人と暮らし編〜」下野敏見著 2006/南方新書
  - 「正月の来た道」大林太良著 1994/小学館
  - 「日本人の縁起かつぎと厄払い」新谷尚紀著 2007/青春出版社
  - 「日本精神文化の根底にあるもの」渡辺勝義著 国立民族学博物館資料より
- \*今回の取材に際し、多大な協力を下さいました、長井家の皆様へ、深く感謝を申し上げます。

## ミニコラム

### 益救神社 年越し祭

大晦日31日の、23:30から宮之浦にある益救神社で行われる、年越し祭り。屋久島太鼓保存会のメンバーが、年越しの仕事を終えた年神に扮して太鼓の演奏を行う。新年を迎える喜びの太鼓を打つ神々の前に、悪行を働く神々がやってきて、太鼓の打ち合いが行われる。かがり火が焚かれた、神聖な雰囲気のもと行われる神事は、壮大で一見の価値在り。屋久島太鼓保存会の歴史は30年ほど。沖縄や奄美大島のような伝統音楽が無い屋久島に、音の文化をと発足された。「神事として100年続けば、伝統行事になる」と、リーダーは言う。文化とは、意外にこういう人の思いから生まれるものかもしれない。







← 猟師・牧瀬一郎氏

# ヤクシカを撃つ

榎村 精一

## はじめに

昨年の屋久島では「鹿」に関する議論が高まった。おそらく縄文時代から屋久島の人々と深く関わってきた「ヤクシカ」は、今では「農作物を荒らし、野山の貴重な植物を食う悪者」となり、農家・一部の学者からは良い目で見られていない。

戦後のヤクシカは狩猟で絶滅寸前まで減った。この頃はなんと永田岳山頂の近くまでシカ獲りに行ったという。色々和本を読んでいると、シカの増殖率というのはとても高く<sup>2)</sup>、その後の森林伐採により餌となる下草が増えたのと、昭和46年には保護政策がとられたおかげが増えた。そのせいで餌が減ったのか、本土では食べないと考えられる植物や、なんとカエルやら鳥の死体<sup>1,3)</sup>、さらには、シカの死体から、なぜかセメントの破片まで食べている(YNAC小原の観察)。この餌の激変化は日本中で見られており、富士山麓・青木ヶ原樹海のシカはなんとトリカブトまで食べてしまう。(この場合は茎だけを器用に選んで食べるようだ。)

現在、日本中でシカ増加とその影響が取り沙汰され、このままでは日本中の森がシカに食われて変わり果てるのではないかと言われた。シカが農作物に与える被害も大きい。シカは一夫多妻なので、メスも減らす方が次世代数をコントロールしやすい。自然環境と農作物への影響を考え、2007年に鳥獣保護法が改正され、オスシカに加えメスシカの狩猟が解除された。(ただし、鹿児島県の政策によりヤクシカのオスは平成23年11月30日まで禁猟)

## 狩猟とは何か

50年前の屋久島では立派な生業だった。皮や頭骨は海外に輸出され、肉は当然食べた。しかし昭和46年以後、保護政策により狩猟が禁じられ、食料と金銭の確保手段だった狩猟もすたれ、今では生業にはならない。現在、屋久島には約60名の狩猟免許所持者がいる。

狩猟は次の2つに分類される。

・有害鳥獣駆除⇒農家などの依頼で行う。これは年中可能だが許可が必要。

・狩猟⇒狩猟期間内に、指定鳥獣のみを、猟区内で、制限頭数を超えない範囲で狩る。狩猟期間は概ね11月15日から2月15日までだ。

今回は、狩猟の様子を取材し、ヤクシカを取り巻く現状を考察しよう、という事で、2008年1月13日、屋久島町猟友会・副会長牧瀬一郎氏のご好意で、シカ猟に同行させていただいた。今回の狩猟は駆除と狩猟の両方を兼ねて永田のミカン畑裏の山で行った。有害鳥獣駆除で出動する場合は、まず先に被害地域を中心に、「だいたいこの辺で」と、狩猟範囲と期間が決められ、そこに出るシカを撃つ。狩猟で行う場合は、今日はここら辺で、と決めて行く。(といってもあくまで猟師の勘)。一日一頭という制限だが、一頭狩るのがどれだけ大変かはやってみないとわからないだろう。

## シカ探しと猟犬



左・ヤク8歳♂ 右・エミ10歳♀ シカを待っています

猟に猟犬は不可欠。山での「シカ探し」は犬の仕事であり、狩猟成果は「1に犬・2に足・3に鉄砲」というくらいで、見つける⇒追う⇒撃つ という猟の流れの全てに猟犬が関わる。上の写真は牧瀬さんの犬。イチローの如く締まった猟犬の体を見ればその苦労が偲ばれる。猟犬育成も狩猟の一環で、実戦経験を積みつつ一犬前に育てるのに普通は2年かかるという。犬の性格によっては、一頭のシカをずっと付狙う奴や、近場のものに跳びかかる奴など、色々だという。

さて、実際の猟では、まず犬を山に放ち、人が付いて歩く。シカを見つけた犬は、ワンワン吠えて獲物を追い回すので、ヒトはそばまで走ってゆき、じっと待機する。動くときは絶対に物音を立ててはいけない。そして木や岩陰に隠れ、犬の声と無線連絡を聞きつつシカの動きを予測する。シカがこっちに来れば当然撃つが、命懸けで逃げるシカに簡単には当たらない。今回も何発かの弾丸がシカの俊敏さを奪ったが、地面にシカを引き倒したのは犬だった。見ると、喉にキレイに穴が開いていた。

シカの断末魔はウシのような声で、穴の開いた喉からは「ヴォー!!」という声が漏れ、真っ赤な血の泡がポコポコ溢れる。犬はその穴から肉を引きずり出そうとするのだが、牧瀬さんはこれを制し、脇へ追いやる。その後、頸動脈を切って血を抜き、内臓を引き出す。内臓を犬に与えるとこれを喜んで食べていた。(写真下)



湯気の立つ内臓をむさぼる犬を横目に、ロープで4つの足首を縛り、首を固定して私が背負って下山した。シカを追い回す時間よりも、待機とシカ探索の時間のほうがずっと長かった。その後、四つ瀬近辺の県道沿いの小さな森でもシカを獲った。銃を使う狩猟は日の出～日没までと時間が決められている。この日も日没で猟は終わった。

## 食肉利用と食品衛生法

今回は猟師5人・犬11頭で行い、6頭を仕留めた。解体の際、皮や頭骨、犬が齧った部分、弾丸命中部位などは廃棄する。

同行の私も、肋骨周りの肉・モモ肉・背ロースを計5kg近く頂いた。ナイフ2本(皮剥ぎ用・肉切り用)と、ナタ1本(背骨と肋骨を叩き切つて外す)だけで解体し、1頭は約10分で終わる。背ロースは凍らせて刺身に、モモは骨ごと3時間ほど煮込んでカレーにした。アクがとて多いが、シカのダシは超美味である。

ただ、このようにシカ解体設備を全く使わない場合、食中毒菌等が付く可能性があるという事で、食品衛生法上、「食肉」として市場流通できない。ヤクシカ肉は当分、観光客の口には入らないままで。



← 解体風景。吊るし切りにする。慣れた手つきで、シカはどんどんバラバラに。

## ヤクシカの生活と分布

屋久島の季刊誌「生命の島」に、71号から6回連載のヤクシカ記事があり<sup>1)</sup>、

- ・睡眠は1日2時間程度
- ・餌は主に落ち葉や、落下した果実
- ・動物の糞や死体・骨・鳥の羽も食べる
- ・・・など、シカの生態を軽快な文で紹介している(非常に面白いので、バックナンバーを買って、ぜひ読んでみてください)。

シカの分布は不明点が多く、基礎資料として1995年・2004年に調査されている。農業の盛んな島の南部地域、例えば蛇の口滝、モッコヨム岳周辺などはシカが少ない。反対に里に人がいない西部照葉樹林や漁師町の一湊周辺は、シカが多い傾向にある。

横浜国大の松田裕之氏は、屋久島全島で少なくとも8000頭のシカがいると推定した<sup>5)</sup>。その殆どは西部・一湊方面に偏っている。西部林道は標高が低く、温暖で生産性が高いので植物の生育が早く、エサにしやすい雑草も茂りやすい条件にあるが、対してヤクスギランドへの沿道の、標高の高い場所などでは生産性が低く、すぐに草は食い尽くされてしまう傾向がある。このため、シカ数は少なく、自然館～淀川登山口までの15km近くの移動で、10頭程度しか見ない。



↑ 淀川沿道 ここでもシカとサルはセットなのが

また、屋久島ではサルとシカの分布はよく一致する<sup>4)</sup>。木の上で食事のサルが落とす葉などがシカの餌になるのだ。白谷雲水峡でサルの声が聞こえ、そこへシカの親子が一目散に走っていくのを見た。シカ分布はサル分布にも影響されるだろう。

## 屋久島の森とシカ問題

屋久島猟友会の上野義昭さんに聞くと、来年度は900頭のシカを駆除するという。それに狩猟分を上乗せすると、1000頭近くのヤクシカが狩られるかもしれない。農林地や島の自然を荒らすシカは増えるのだから、狩猟圧を増せばいい、ともいう。ではシカ害をなくすために、どこまでシカを撃てばいいか? 絶滅させればいいのか? だがそれが正しい方法なわけがない。シカ捕獲で森を保全するのなら、まず全島個体数を調べ、適切な捕獲頭数を決め、最適バランスを考えるしかない。

ヤクシカは基本的には貴重な固有植物や農林業への害獣としてのイメージが強いので、駆除対象として今後もしばらく撃たれるだろう。そのシカが最も多い西部林道周辺は鳥獣保護区域の「特別保護地区」で、狩猟はまず許可されない。ここでのシカ密度は40~80頭/km<sup>2</sup>という<sup>2,3)</sup>。これは異例の高密度で、北海道ではkm<sup>2</sup>あたり5頭を超えると森は徐々に荒れるという。ではこの森は? 調査では、樹木の直径別出現数は小さいものほど多く<sup>3)</sup>、台風、サルが落とす、あるいは自然に落ちる枝葉や果実でシカが暮らしているようだ。落下物の量は、日本の他の森より随分多いのではないだろうか。シカにとってサルと台風は不可欠の仲間らしい。この西部の森は「荒れている」のだろうか。ヒトはここを利用しないから「被害」は何も無い。



↑ 西部林道周辺が鳥獣保護区だと示す看板

現行の鳥獣保護法は「保護区外のシカ」が狩猟対象で、考案次第では鳥獣保護区が「ヤクシカ牧場」のようになってしまう。それはそれでいいのだろうか。国立公園特別保護地区、原生自然環境保全地域、鳥獣保護区、道路、公園、神社などは禁猟区で、それ以外は猟区だが、そのうち銃器使用禁止箇所を禁猟区に足すと、全島の3割程度になる。そのシカの頭数や暮らしぶりは明らかではない。

シカとバランスの取れた森、よい森、よい環境とは何か。森の多様性はどこまで高めればいいのか。固有種の絶滅や農林業被害を防ぐには柵で囲めばいいのか。日本中で起きているシカ害と屋久島のそれは同じなのか。何をもってよしとするかが見えなければシカ問題は終わらないだろう。

## 参考文献

- 1) 生命の島71号:(有)生命の島(2005)
  - 2) 世界遺産をシカが喰う:文一総合出版(2006)
  - 3) 世界遺産屋久島:朝倉書店(2006)
  - 4) ニホンザルの自然社会:京都大学学術出版(2000)
  - 5) 横浜国大 松田裕之氏HP:「公開書簡」
- ※ 下のURL、横浜国大の松田裕之先生作のエクセルで個体数変化の計算ができます。興味のある人はどうぞ。  
http://risk.kan.ynu.ac.jp/matsuda/2006/yaku06.xls



# サンゴの健康診断

高橋 宏美

サンゴは動物です。私たち人間のように骨格があって、その上には「お肉」・いわゆる体があります。ちなみに肉むき出しで骨格がないのがイソギンチャク。その体には口が一つあります。おしりの穴はありません。排泄物はこの口から出すしくみ。我慢強く観察していると、サンゴの口から火山の煙のようにポフッとうちが出てきます。

さて、タイトルの「サンゴの健康診断」に話を戻しましょう。

人間の体調を測る際、まず顔色を伺ったりしますが、サンゴの場合はその「お肉の色」を観察すると、おおよその体調が推測できてしまうのです。この調査方法は「コーラルウォッチ」(以下CW)といい、世界最大のサンゴ礁・グレートバリアリーフを保有するオーストラリアの学者が考案しました。

このCWはサンゴの色を数値化することにより、サンゴが元気なのか、弱っているのか、その体調チェックが子供から大人まで誰でも簡単にできています。これを日々モニタリングし続け、そのデータを海水温・水深などと合わせて考察すると、今はまだ解明されていなかったサンゴの生態の秘密が明らかになるだろうという画期的な調査方法でもあります。

下はオオハナガタサンゴの写真。下部のくさび形の部分がサンゴの骨格。その上にあるシイタケのかさのような部分がサンゴの「お肉」。



サンゴは種類によって様々な色がありますが、注目すべきはその「色の濃さ」。それを決めているのは褐虫藻という単細胞の小さな植物の量。実はサンゴは体内で畑を作っているようなもので、その植物たちに自身のエネルギーのほとんどを依存しているのです。サンゴの体内に住んでいる植物の量は、その色の濃さによって、1~6という数値で表します。

## 6; 色が濃い

褐虫藻たくさん。サンゴが必要なエネルギーを十分にもらえるので元気。

## 5 ~ 2;

色が薄くなる程、褐虫藻が少なくなる。エネルギーをあまりもらえず、弱っていく。

## 1; 白色

瀕死の状態。褐虫藻がほとんど抜け出てしまい、白い骨が透けて見えている。この状態が長く続くと、やがてサンゴは「餓死」してしまふ。

この色の変化は毎年、水温の季節変化に応じて、「濃い〜薄い〜白化」の状態を行き来するのが一般的です。水温の低い冬場、20度~18度は色が濃くて、水温の高い夏場、28度~30度になると色が薄くなります。特に暑さに弱いミドリイシなどの枝サンゴなどは白くなりやすいです。そして、秋から冬にかけて水温が再び下がってくれば色は濃くなっていきます。



しかし、高水温が長期間続き、この「白化」の状態が長引くと、サンゴは常におなかが減った状態になり、やがて餓死します。今年沖縄ではこの現象により、素晴らしいサンゴ礁のサンゴが次々と真っ白になった地域が少なくありませんでした。その純白のサンゴの正体・・・それは「死の色」だったのです。

屋久島の北部に、一湊タンク下というダイビングポイントがあります。そのサンゴの優占種は「オオハナガタサンゴ」。今年は懸念されていた高水温・・・ぬるめのお風呂のような海水温が早い時期から長期間に渡り続いた為、その白化の規模、また時間が長引いてしまいました。けれど、季節は巡り30度近くあった水温は12月には21度。夏場白くなり弱っていた固体も大部分がその色を濃くしています。若干まだ色が薄かったり、完全に白くなり、死んでしまった個体も中にはいますが、去年の石垣島の、とあるポイントのような、その湾内のサンゴが全滅! そしてそこで暮らす多くの生き物も高水温に耐えられず次々と死に絶え、辺りにはその腐敗した臭気が立ち込める・・・まるで地獄絵図のような・・・そんな事態には屋久島の海はなりませんでした。とりあえず今年は・・・

きっと人類が文明を捨てることのできない限り、早急に水温や気温を下げることはできません。けれど、観察し、記録を続けることはできます。モニタリングを継続することで、その原因や対処法を探り出すことができるかもしれません。海面下で多くの生き物たちが暮らす、そのことを知る一人



として、最後まであきらめず、その未来をこれからもずっと見つめ続けていきたいと思ふ。

最後に、サンゴに関する調査は様々な手法がありますが、このCWは調査者の数層を低く設定し、海というキーワードに惹かれる人たちが、誰でも気軽に、そしてより深くサンゴ礁の生態系を知ることができる「きっかけ」となり得るものです。今年は「国際サンゴ礁年」。議長国である日本が掲げたテーマは、サンゴについて「知ろう! 行こう! 守ろう!」。より多くの人に、海の生き物たちへの興味を持って欲しい! そのチャンスの一つとしてこの「サンゴの健康診断」を発信していこうと思ふ。

\*\*\*\*\* ごあいさつ \*\*\*\*\*

私事となりますが、今年5月25日に、約10年間お世話になったYNAOを退社しました。入社当時が21歳、現在31歳。月日が経つのは本当に早いですね。皆様には長い間、本当にお世話になり感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございます。今後はこの夏より屋久島にて独立。夫婦でダイビングガイドをしていきます。店名は、

屋久島ダイビングステーション「まる」  
<http://maru-yakushima.net/>

女性オーナーガイド(私)と板前ダイビングガイド(旦那様)がダイビング・シュノーケリング・シーカヤックなどを駆使したツアーをプロデュースしていきます。屋久島にお越しの際は、ぜひお声をかけて下さい。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



# 国際サンゴ礁年に思う

~ サンゴ15年 ~  
松本 毅

## 屋久島におけるサンゴ調査

過去の資料を探しているときも面白いものを見つけた。1989年の屋久島海洋生物研究会の第1回サンゴ調査の計画書と調査写真である。

屋久島海洋生物研究会は、当時屋久島の海に関する文献が皆無であることに愕然とし、少しでも屋久島の海を我々が記録していこうと松本・市川・小原・砂川さん・下防さんなどで結成された。その最初の活動として参加した89年魚種調査コンテスト「フォト・デュー・ポアソン」第2回大会でなんと初参加で全国優勝を果たしたのである。このことは南日本新聞に大々的に取り上げられ、屋久島の海もすばらしいのだということも全国的に知らしめることになった。今、屋久島のあちこちで「屋久島は魚種が全国一」というようなフレーズはフォト・デュー・ポアソン優勝のことを言っているのである。その後、フォト・デュー・ポアソン第2・3・4回大会と連続優勝したが第5回大会でこのコンテスト自体が消滅してしまった。

第2回大会優勝の勢いでもっとなにかやろう! と計画されたのが春田浜のサンゴ調査だった。当時、屋久島のサンゴに関する調査報告書は、1979年に行われた環境庁委託調査「第2回自然環境保全基礎調査 干潟・藻場・サンゴ礁分布調査報告書」があるが、これは航空写真の分析と聞き取り調査のみで行なわれたものである。(後の1990年第4回自然環境保全基礎調査 干潟・藻場・サンゴ礁分布調査では、屋久島海洋生物研究会がサポートをし、屋久島全周をマンタ法く広域のサンゴを調査する手法)により4日間にわたってサンゴ調査が行われた。)

1989年10月17日、我々が屋久島のサン

## 国際サンゴ礁年とは

サンゴ礁保全を目的とした国際的な協力の枠組みである「国際サンゴ礁イニシアティブ」は、2008年を国際サンゴ礁年とすることを決定しました。「国際サンゴ礁年」には、世界各国において、大勢の人にサンゴ礁についての理解を深めてもらう為の普及啓蒙活動や、多様な主体(企業、NGO、行政、研究者、市民等)が連携したサンゴ礁保全活動が展開されることになっています。今年、日本が議長国です。

ゴの実態を明らかにするぞ! と勢い込んで春田浜に出かけたのである。ところが、調査対象であるサンゴをまったく同定することができず、事務所で意気消沈することになった。撮ってきた写真を前に呆然としながら、とにかく専門家に見てもらおうということになり、まったく面識のなかった当時九州大学天草臨海実験所の助手だった野島先生に無謀にもサンゴの写真を送りつけ、同定をお願いした。こんな不躰な依頼にも丁寧に一枚一枚同定して送り返していただいた。その写真アルバムが手元にある。

第1回春田浜サンゴ調査の失敗にもめげずに、1990年、国立公園協会に「屋久島におけるサンゴ実態調査」の50万円の予算書を出したところ回答は保留。想いはさらに膨れ上がって野島先生を交えて屋久島の沿岸生物調査をやろうと翌年に再度「屋



1998年5月24日の粟生のサンゴ

久島におけるサンゴ礁の保護に関する基礎的研究」で予算申請を出した。今回は、市川の執念が(財)海中公園センターを動かし、40万円の予算を獲得した。早速、野島先生を団長に「屋久島沿岸海洋生物調査団」が結成された。1991年9月一次調査、12月二次調査を行い、「屋久島沿岸海洋生物学術調査報告書」が作成された。これが屋久島における初の海洋調査報告書となる。このときの粟生海岸の波打ち際にはクシハダミドリイシがびっしりと群落を作っており、干潮時にはサンゴをボキボキと踏みつけて入らなければならない程であった。野島先生も屋久島町町長に粟生のサンゴの素晴らしさを力説しておられた。ダイビングポイントとして使っていた粟生・湯泊・麦生の浅い海にはどこもクシハダミドリイシで埋め尽くされていた。

## サンゴの危機

ようやく屋久島のサンゴに光が当たり始めた頃、麦生の港の拡張工事の計画が発表された。7ヵ年計画で屋久島町が事業主体で麦生の港が東側に大きく拡張されることになった。その図面を見ると見事なクシハダミドリイシの群落の上に堤防が作られることになっている。確かにクシハダミドリイシは3m程度の浅い水深にあり、堤防をつくるには都合の良い浅い岩礁域であることは分かる。しかし、町はそこにすばらしいサンゴ群落があることを知らないのではないか、と市川と二人で

メモとで町長に直談判に出かけた。町長にサンゴの説明をしたところ、「そうですか、分かりました。」とあっさり回答をいただき、今現在、麦生の港は斜めに伸びるはずの堤防が見事に90度に曲げられている。町単独の事業であったことと町長が海の問題について理解があったのでこのサンゴは守られた。



2008年6月麦生の堤防

また、一湊では1995年度から一湊港の沖合いに100mの堤防を新設することになった。しかし、その手前にオオハナガタサンゴの大群落があり、地元ダイバーが保護を訴えた。鹿児島県が調査をしたところ、日本では最大級と分かり、またこの一帯が特にサンゴ密度が高いことが確認され、防波堤の計画変更を発表した。漁業協同組合は、漁民の生活のことも考えてほしいと代替案として現在の堤防の延長と対岸からの堤防の新設を訴えてきた。最終的に鹿児島県は、沖堤防の新設案は白紙撤回し、現港内の整備をすることで漁協と合意した。今は、ダイビングの重要なポイントとして利用され、多くの研究者がこのエリアの生物の豊富さに驚いている。



## 新たな危機

この二つのポイントは、開発という危機からサンゴの存在を訴えることで破壊を免れることができた。しかし、サンゴは新たな危機にさらされることになる。

### 98年白化現象

1998年8月上旬ごろから海水温が30℃を越える高水温が続き、サンゴが白くなっていることに気づいた。その頃、沖縄でもサンゴが白くなる白化現象がニュースになっていた。この年、フィリピンや沖縄近海での台風の発生がなく、海水温が上昇し沖縄から南九州で広範囲に白化現象が起こった。皮肉にも1997年は国際サンゴ礁年であり、その翌年に大規模な白化現象が起こったのである。屋久島においては、ほぼ全周で白化現象が確認された。10月には白化は収まったが、栗生・湯泊・麦生などの浅い水深のミドリイシ類はほぼ全滅した。10年たった現在では20cm程度の小さなミドリイシ類の群体が生育しており、徐々に回復しつつある。

### 03年オニヒトデ調査

平成14年度海中公園地区等保全活動事業で全国的なオニヒトデの調査が行われた。沖縄・奄美においては白化現象から回復の兆しが見られたところへオニヒトデの異常発生があり、さらに打撃を受けることになった。しかし、屋久島の調査では、オニヒトデの確認はなかった。沖縄・奄美に続き、天草・足摺・串本、また、桜島でもオニヒトデの駆除が行われたにもかかわらず、屋久島において1匹も確認されなかったのはなぜだろうか？ 沖縄・奄美で発生したオニヒトデの幼生は当然黒潮に乗って運ばれてきているはずである。潮にのってきた幼生は一旦入り江のような潮の流れのないところに入り込むのではないだろうか。奄美の加計呂間や錦江湾、天草などはまさにそのような環境である。屋久島の場合、ほとんどが外洋になり、オニヒトデの幼生が入り込むことができなかったのではないだろうか。94年ごろ元浦にオニヒトデが増えたことがあったが、元浦は屋久島の中では内湾的な環境であることから一時的にオニヒトデの幼生が入り込んだものと見ることができ、幸い屋久島におけるオニヒトデの被害は近年も確認されていない。

### 志戸子のウスサザナミサンゴ

2001年から志戸子のコブシメの産卵を観察するために通いつめた。ウスサザナミサンゴの大群落があり、コブシメがほぼ1年を通して産卵に来ていた。多いときは30匹を越え、ダイバーを気にすることなく産卵をしていた。このウスサザナミサンゴの状態を記録するた

め、03年04年と2回にわたり屋久島海洋生物研究会で調査を行った。2回目の2004年6月に調査を行った際、一部のウスサザナミサンゴの突起部分が壊れていることを確認した。その後、徐々に壊れた部分が拡大していき、翌年にはほぼ全体が壊れてしまった。

原因はまったく判らないが、突起部分だけが踏みつけられたように壊れてしまった。コブシメの卵が産み付けられる部分なのでこうなるとコブシメは卵が産めなくなってしまう。05年の冬にはコブシメはまったく来なくなってしまう。2004年8月町長への請願書

またさらに、志戸子沖に新たな堤防が作られることになった。ウスサザナミサンゴの群落から西に100mほどしか離れておらず、工事の影響が懸念された。03年04年のサンゴ調査の結果を元に上屋久町町長に工事には充分サンゴへの配慮をしていただけるよう請願書を提出した。また、志戸子の区長さんにもお願いした。区長さんは、環境への意識が高く、サンゴのことも知っており、堤防自体は志戸子の漁師さんが充分潮の流れなども考慮して検討したものであるということだった。実際工事が始まってからもサンゴへの直接的な影響は観察されなかった。現在、工事はほぼ完成した。

ウスサザナミサンゴは、その後徐々に回復を始め、壊れた部分から板状に成長をし、板状に広がった部分から少しずつ突起が出現した。まだ、コブシメが産卵に使えるほどの回復ではないが、このまま順調に回復し、いつの日かコブシメが戻ってくることを期待したい。



### 現在の危機

しかし現在、サンゴにこれまでにない新たな危機が迫ってきているのである。化石燃料の消費による炭酸ガス濃度上昇、温室効果による気候の変動、地球温暖化による海水温の上昇、などの地球規模の環境変化である。

日本近海において、ここ数十年でサンゴの北限が少しずつ北上しつつある。海藻の海だった天草や高知が徐々にサンゴの海に変わりつつある。また、最近の研究では、海水中の炭酸ガス濃度が上昇するとサンゴが

炭酸ガスを取り込めなくなり、骨格を形成できなくなるということが判ってきた。単純にサンゴの分布域が広がるというものではなく、サンゴ自体が生きていけなくなる可能性が指摘され始めた。

これまでのように、一時的な気象条件で起こった白化現象や局地的な開発によるダメージなどは自然の回復力や地域的な保全の努力で何とかサンゴを守ることは可能であった。

しかし、地球規模の環境悪化に対しては地域的な取り組みだけではどうにもならない状況になってきた。また、地球規模での環境悪化は長期的に広範囲に目に見えない速度でゆっくりと進行してきた。環境変化を及ぼす因果関係が判りにくく、防止策を見出すことが大変困難である。その上、出された防止策を実施するには、おそらく世界的(特に先進国)な取り組みが必要であり、場合によっては経済構造そのものを見直さなければならなくなる。

こうなると我々に今できることは、地道なモニタリングを続けてその変化を注意深く観察し、警鐘を鳴らし続けることではないだろうか？

### サンゴ礁年

2008年は世界的な取り組みとして国際サンゴ礁年とした。環境省は前回(1997年)のサンゴ礁年で何も取り組めなかった反省として、今年は官・民・学で幅広く取り組みを展開している。今年の国際サンゴ礁年で掲げられたスローガンは、「知ろう、行こう、守ろう」である。屋久島では、屋久島海洋生物研究会が中心になり、国際サンゴ礁年屋久島実行委員会を立ち上げた。サンゴ礁年に我々が取り組んでいることは、効果があるのかのかわからないような漠然とした呼びかけよりも「実際に屋久島にサンゴが存在する事を知ってもらい、実際にサンゴを見てもらい、何か変化が起こっていないかを監視する」ことである。できるだけ多くの人にサンゴとはどのような生き物なのか、サンゴのいる環境が海の生態系の中でどれだけ重要であるかを知ってもらい、地道ではあるが継続的にモニタリングを続けて、海の中でどのような変化が起きているのかを実際に見てもらい、それを守るために自分に何かできることはないかを常に考えてもらおうかと思うのではないかと。最近、環境問題を考えると個人的な善意ではもうどうしようもないところまで来たという危機感を覚える。しかし、マスコミなどで氾濫する情報に惑わされることなく、しっかりと足元の自然を見つめることで自分のやるべきことが見えてくるのではないかと。思う。

## 焚き火をしよう

佐藤 崇之



YNACのリバーカヤック・シーカヤックのツアーでは焚き火を用いて、昼食をつくる。たとえ雨の日でも湿った薪で火を起さねば飯は食えない。焚き火ランチに欠かせないのは火をコントロールする技術だ。どんな状況でも確実に薪に火をつけ、料理に必要な分の適度な火を保ち続ける。たったこれだけのことなのだが意外と難しい。火のコントロールひとつで料理の味にもグンと差がついてしまうのだ。今回はアウトドア活動には欠かせない焚き火をレポートしてみたい。

### 焚き火の前に

まずは焚き火に適した場所を見つけよう。国の法律や地方自治体の条例で焚火が禁止されていたり、キャンプ場であれば直火禁止等のルールが設けられている。また、周辺の住宅環境なども考慮し、煙による迷惑も考えなければならぬ。その場所が焚き火可能かどうかをチェックし、焚き火可能な場所であっても周囲に引火する危険がある場合は十分注意しなければならない。

### なにを燃やすか？

焚火で燃やすものといえば何を想像するだろう。落ち葉や雑木などが定番だが、家庭ごみを庭先で燃やすのが焚火だと思の方も多いのではないだろうか？ 実際、筆者も子供のころ家庭ごみを庭先で燃やすのが日曜日の決められた仕事だった。

焚火とはそういうものだと思っていた。

ただ、現在はダイオキシンの問題などもあり、家庭ごみを焼却する野焼きは〔廃棄物の処理及び清掃に関する法律〕の第十六条の二で禁止となっているので、行ってはいけない。ただ、例外として〔廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令〕の第十四条の五に(たき火その他日常生活を営む上で通常行われる廃棄物の焼却であって軽微なもの)は行ってよいとして法的にも認められている。また、家庭ごみを燃やす〔野焼き〕と落ち葉・流木を燃やす〔焚火〕を混同してしまいがちだが、これはまったくの別モノである。家庭ごみ内に含まれるビニール等を燃焼させると発生するダイオキシンの量が飛躍的に増加するので、焚火の際は落ち葉や流木などの自然物だけで行うのが鉄則である。

### 揃えるべき道具と燃料

必要な道具はライターとナイフ。極論を言うと、道具がなくても焚き火はできる。火おこしの達人なら、良く乾燥した枯れ木を力いっぱいこすり合わせれば火種をおこせる。日本の焚き火研究家の権威である和光大学の関根秀樹氏は、キリモミ式発火法(板に開けた溝に棒を使い錐で穴を開けるように擦る)であれば6秒で火種を作ることができるそうである(環境GOO [http://eco.goo.ne.jp/business/csr/ecologue/ecologue08\\_01.html](http://eco.goo.ne.jp/business/csr/ecologue/ecologue08_01.html))より。アウトドアを生業にするものとしてはそのぐらいの技術は身につけ、いつ何時でも華麗に火をつける技術が必要なのだが、着火道具も人間の進化と共に発展してきたので、今回はその恩恵にあずかって簡単・便利なライターを使って火をつける。ちなみにチャッカマンのほうがもっと便利である。

あとは良く切れるナイフ・ナタ等があれば表面が雨で濡れている木でも二つに割り、内部の乾燥した部分を取り出し、雨の日でも火をつける事ができるのだ。焚き火をすばやく簡単に行うにはこの二つの道具が必需品である。

### 燃料の焚き付けと焚き木

燃料になる薪も奥が深い。まずは着火材となる焚き付けを用意する。ライター



ヤクスギを削って焚き付けに

で火をつけるならば、その炎よりも細く薄っぺらなものを目安とすると良い。スギの葉や枯れ草などが定番だが、屋久島であれば水辺に流れ着いたヤクスギの破片を、鯉節のように薄く削ったものが最高の焚き付けとなる。ヤクスギは油を多く含んでおり、実に燃えやすい。雨の日でもヤクスギの破片がひとつあれば確実に火がおこせるのだ。

次は焚き木選びだ。焚火の炎を大きくするためには、やはり小さな木から大きな木へ火を燃え移らせなければならない。なので、焚き木も細いものから太いものまでサイズを揃えたい。

また、焚火の用途によって燃やす木の種類にも気をつけたい。一般に針葉樹系の材は樹脂を多くふくんでいるので、すばやく燃え大きな炎を出しやすい。ただ、燃やした際にヤニが多く出るので、網焼きバーベキューなど直火料理には向かない。せっかくの美味しい肉もヤニで苦くなってしまうのだ。また、すぐに燃え尽きてしまうので火持ちが悪く、おき(熾)になりにくい。それに比べ目の詰まった硬い広葉樹ならばヤニも少なく、ゆっくり燃えてくれるので火持ちもいい。おきになって遠赤外線をたくさん出すので、直火料理にも最適である。

焚き始めは火付きの良い針葉樹で、火が安定したら長持ちのする広葉樹に移行していく、といったような順番で使い分けるのがコツである。



細いものから太いものへ火を移す



火が安定するまでの手順

### 1 火床づくり

地面が雨などで湿っている場合や雪上での焚火では、火床となる太い薪を数本土台になるように並べる。その上で着火すると熱が地面に逃げずに効率よく焚火ができる。また、短時間で焚火を起こしたい場合も火床を作っておけば火が安定するのも早い。大事な薪を少しでも無駄にたくない場合に有効である。

### 2 いよいよ着火



火は下から上へ燃え移る

ここまで準備が整ったら、やっと着火である。一度火がつき始めれば、その火が安定するまでは焚火のそばから離れられないので準備はしっかりしておこう。

火床の上でスギッパ(杉の葉)と細枝の束に火をつける。このとき火は下から上へ燃え移るということを忘れてはならない。必ず束の下から着火しよう。この段階で火がなかなかつかない事がある。息を吹いて風を送っても、熱くなりかけている焚き木を冷ましているだけなので火はつかない。原因は焚き木が十分に乾燥していないか、ライターの炎の大きさに対して焚き木が太く・厚い可能性があるのも、もっと細く・薄いものに変更しよう。

### 3 太い薪を乗せていく

着火材に使ったスギッパや細枝はよく燃えるが、燃え尽きるのも早い。燃え尽きる前に次の薪をくべていかねばならぬ



炎を覆い隠すように薪を置く

いのだが、このくべる薪の量が大切である。多すぎれば空気の流れを悪くして太い木に火は燃え移らないし、少なすぎれば太い木に火が燃え移る前に下の細い木が燃え尽きてしまう。ちょうど炎を覆い隠す位の量が適当である。これならば炎の熱が過不足なく上の木を暖めてくれる。

### 4 焼きを保ち、そして楽しむ

太い木にまで火が燃え移り、熱量が十分になれば、後はそれほど気を使わずとも焚き木をくべればどんどん火は燃え移っていく。焚火は焼きを作るまでが一番気を使うのだ。ここまですればゆっくりと酒が飲める。料理が作れる。本当のお楽しみはこれからである。焚き木が焼きの状態になれば、そこからたくさんの遠赤外線が出てくる。直火料理に持って来いの火だ。

お勧めはシンプルに牛肉の直火焼きである。塩コショウをしただけのサイコロステーキ用の牛肉を串の先端にひとつだけ刺し、自分好みの焼き加減になるまで焼いて食す。遠赤外線の効果で中はミディアムレアなのに程よく暖められ、肉汁が溶け出してくる。そしてビールを一口すればもう何もいうことはないのである。



焼きの状態になった焚火

### 5 消火

焚き木は白い灰になるまで燃え尽きさせるのが理想である。白い灰はミネラルが豊富で土壌に帰ればよい肥料となる。もし、途中で水をかけて消火する場合でも黒い墨のままだとなかなか分解されず自然に帰りづらい。持ち帰ってごみとして処分するのも芸がない(もったいない)ので、次回の焚火のときに再利用して、しっかりと白い灰にまで燃え尽きさせてしまいたい。

### 焚火は下火の時代

こんな楽しい焚き火も都会ではできないのが現状ではないだろうか? 煙を出す



ことは周辺住民の迷惑となり、挙句の果ては通報され警察沙汰にまで発展してしまう。都市生活者が手に入れた便利さと引き換えに、焚き火という行為は過去の遺物として、都会生活にフィットしなくなってきたのである。

焚火はダイオキシンを発生させる原因として悪く言う人もいる。だが、結論から言えば焚き火は悪ではない。ダイオキシンは炭素、水素、塩素、酸素を含む物質が約800℃以下で燃焼した時に発生する。海岸に落ちている塩を含んだ流木が燃焼するだけでも(塩の中には塩素が存在する)少量のダイオキシンは発生する。そういう意味では人間は昔から焚き火を通してダイオキシンを発生させ、ダイオキシンと付き合ってきたのである。要は焚火の仕方の問題があるのである。人類がいつ頃から火を道具として扱うようになったのは明らかではないが、火をコントロールし、暖を取り、生では食べないもの(米など)を加熱調理してきた事で生き延びてきたのだ。

最後に、我々ガイドは焚火を通して火の素晴らしさと、人間も自然の生態系に支えられている動物である事を伝えられる、数少ない職業である。焚火という行為が現代社会から消えかかっているからこそ、積極的にアウトドアツアーでは焚火をするべきではないだろうか?

### 参考文献

「焚火大全」創森社  
吉長成恭・関根秀樹・中川重年編  
「YNAC通信9号 焚き火暦20年」市川聡著

## インタープリテーションの技術



小原 比呂志

### 《 インタープリテーションとは何か 》

何のためにガイドをしているのだろうか。よく考えてみると、ひとつは、楽しく暮らすため。もうひとつは、自然を守るためだったと思に至る。

ある有名な警句をもじって言うと、我々は、教えられたことを理解し、理解したものを愛し、愛したものを守ろうとする。だから自然を守ろうと思ったら、それを理解する人を楽しく増やす必要がある。そういうことだと思う。

自然のなかでは、すべての生き物が、事象が、実に面白い生き様の歴史をもっている。言葉のないそれらの物語を翻訳し、その生き様をそとのぞかせてもらう手助けをする。それが、インタープリテーションという仕事である。

自然を解き明かす、という表現をよく使うのだが、それは自然の言葉を解説する作業といい変えることが出来る。インタープリターは、訪問客によりそい、自然の言葉を翻訳し、あるいは誠実に解釈したことを、うまく語り伝える。エコツアーガイドの仕事の多くは、ツアーの中でインタープリターとしてふるまうことである。

「解説」というと、まずなにを話そうか? と考えるのが普通だろう。このため前稿「エコツアーガイドの知識と自己管理」(YNAC通信22号)では「インプット」すなわちガイドの知識の身に付け方について解説した。知識が身につくと、だれかに喋りたくするのが人間というものだ。

しかし人の前に立って、声高に何かを説明するのがガイドの仕事ではない。訪問客は屋久島の自然に何かを求めにきたのであって、ガイドの話の聞きに来たのではない。ガイドは自然を求めて訪れた人のために、傍らに立ち、翻訳をし、必要な演出をする案内者である。

### 《 「リンク」～関連付けすること 》

インタープリテーションを行おうとするとき、対象についてできるだけ広く深く理解しておく必要があることは当然だが、もちろんそれだけでは不十分だ。どんな面白い(とガイド自身が思う)話であっても、相手が飲み込めないものなら、それは自己満足に過ぎず、話にならない。

エコツアーにおけるインタープリテーションでは、解説によってゲストがその事象をうまく賞味できるようにして、腑に落ちる、目からウロコが落ちる、というような、「わかる喜び」という感覚を過不足なく味わってもらうことが大切であり、そのためにはまずゲスト

がどのような知識・経験をもつ人なのか、把握することが不可欠だ。なぜなら、人間知らないことは「ふーん」で終わってしまうが、自分の知識に関連付けられるものごとには「なるほど!」と感じ、そこに絆を作るものだからだ。そこで、いま鑑賞しようとしている事象が相手に対してどのような効果を発揮するか判断し、その場で解説を構成する。この関連付け～リンクこそが、インタープリテーションを効果的に使う最大のポイントなのである。

たとえば、静岡県から来たゲストがいるとして、その人が確実に知っていると思われる物事にはどのようなものがあるだろうか。静岡といえばなんといっても富士山か、お茶か。ために連想される言葉を挙げてみよう。

富士登山、コノハナサクヤヒメ、修験道、箱根、伊豆、天城山、ブナ、温泉、プレート、沈み込み、フォッサマグナ、大地震、大津波、駿河湾、田子の浦、ヘドロ、製紙工場、深海、サクラエビ、富士川、ラフティング、南アルプス、清水次郎長、越すに越されぬ大井川、参勤交代、徳川家康、今川義元、駿河、遠江、天竜川、天竜スギ、川流し、木材、楽器、ヤマハ、バイク、浜松、ウナギ、新幹線、三方が原、御前崎、浜岡原発、静岡茶、ミカン、イチゴ、温暖多雨、照葉樹林、登呂遺跡、スギ板、水田、弥生文化、サッカー……

ゲストの日常をとりまくこのような世界と、屋久島との間にはなにか必ず共通点があるはずだ。その言葉をキーワードとして屋久島の事象と関連付ける。これを解説の糸口とし、さらに屋久島内部の副次的な関連をひろげてゆくことで、ゲストは屋久島世界にスムーズにリンクしてゆくことができる。屋久島の自然は単に質が高いばかりでなく、日本の縮図といわれるとおり、非常に多様な幅の広いもので、砂漠と極地を除き地球の自然のすべてに対応するものがあるといっている。従ってどの世界ともリンクが可能であり、これも屋久島の強みのひとつといえるだろう。

また山歩きやダイビングを趣味としている人なら、その分野のもっと深い話題が得られ、より強力なリンクが可能だろう。もちろん他の人を置いてけぼりにせず、話を共有できる範囲にすべきである。

このような共通のものを探り出すための会話は、ガイドが自分自身の輪郭を明快に示し、同時にゲストを洞察するために必要な作業である。ゲストとのつながりを深める役割も果たすだろう。

ただ、その人の職業や、屋久島を訪れた動機といった個人的な状況はデリケートな問題を含むことも多く、注意と配慮が必要で、軽々しく踏み込んではいならない。



なお、場合によってはガイドが聞き役に回ってあげる必要が生じることあるし、対話が立体化し面白い展開になることもある。それらについては、ここではふれない。

### 《 プログラムとマニュアル化 》

このようなリンクの展開手順を元に、適切にストーリーとして構成したものが「プログラム」である。

しかし最初からよくできているプログラムなど、普通はまずお目にかからない。仕掛けを考え、ゲストの反応を見て、事例数を増やす中から、こうすればうまく行く、という形を見出してゆくのがふつうだ。屋久島を訪問する人はこういう世界を共有している、という範囲を見出し一般化する作業といってもいい。

この作業から出来上がったプログラムは、いわば最大公約数であり、この手順を骨格として、更なる屋久島の世界を、それぞれのゲストへのリンクを張ってゆくことが具体的なガイドの仕事であり、腕前だろう。

一般的には、よく練られ、考え抜かれたプログラムほど、人を仕掛けの中に誘導し設定どおりに反応してもらう、一種の予定調和を目的としがちである。また、ある地域で自治体などが主体となって新しくエコツアーを開発する場合、ひとつプログラムを作って、それを養成されたガイドがマスターしてゲストに供する、ということはあるケースだ。ガイド側にこういうメッセージや、想いを伝えたい、という目的意識が強く、そういったストーリーでプログラムをかつくりと構成することがあるかもしれない。

このような場合、ゲストから期待通りの反応がないと、うまく行かなかったと考えてしまうものである。しかしこれは、送り手の独りよがりなのだ。ガイドが一方向的に解説するのをゲストが聞いてやっている図、というのは、かたわらで見ている分には面白いが、本人に客観性が欠如しているなら改善はされにくいだろう。ガイド自身の満足度でツアーの成功度を測ってはいけない。

プログラムの固定化は、インタープリテーションの効果を低減させることが多い。1~2時間のショートプログラムなら緻密な設計が生きるだろう。しかし長時間のツアーでは、あまりにも意図的なプログラムが中心だと、ゲストが疲れてしまう。自然は日々その姿を変えるものだし、ゲストの心身条件も変化する。自然の事象を賞味することが目的であるなら、プログラム3に対しアドリブ程度の配分が基本だろう。いうまでもなく、何が出てきても対応できる引き出しの多さは、ローカルガイドの実力として必須である。

またフィールドワーカーとして力がついてきた成長期のガイドなら、10の内容があれば10全部を伝えたい、というような意欲にあふれてしまうことがあるだろう。この場合「熱心なガイドさんだこと」と微笑ましく好意的に受け止めてもらえるかもしれないが、ゲストを洞察すべきところを、ゲストから洞察されているようでは立場がない。

### 《 エンターテインメントとメッセージ 》

研修や実習と違い、エコツアーは観光業の一環であり、あくまでエンターテインメントとして成り立つものである。ゲストにとって、一連の経験がどのように面白かったか、意義深かったか、心地よかったかが問題なのであり、そこに対価を支払う付加価値があると考えてもらえなければ、評価の対象にはならない。

もしガイドが解説に強いメッセージを込めたいのであれば、ゲストが主体的にそれを受けとることできるように設計しなければならない。むしろ自然の事象がすなおに腑に落ちるといことが、限りなく強いメッセージを受け止めることになっている、すなわち

効果的である、と信じていいのではないだろうか。環境教育の場などではメッセージをいかにうまく伝えるかが目的とされることが多いが、基本は同じことだと思える。

このようなことからガイド業務というものはかなり細やかな接客技術を要し、そのマニュアル化は非常に難しい。

プログラムのマスターを軸にガイド養成を行うと、テープレコーダーのようなものができあがってしまうことが多く、失敗しやすい。ガイドの人柄がよく、自然な会話はとても感じがいいのに、解説になるととたんに録音テープのようになってしまおうという例を目にすることがあるが、これは養成の段階でプログラムをマスターすることを優先しすぎたことによる弊害である。

プログラムを軸に、いかに相手を探り、効果的に屋久島の事象をリンクさせてゆくか。この際の引き出しの多さと、関連付けの話し術がガイドのスキルの重要な部分である。

### 《 伏線を張る 》

エコツアーは教育ではなく、観光である。この仕分け方は重要だ。「教育」には現場の先生方の努力にも関わらず、なんとなくマイナスイメージがあり、お勉強はごめんだ、という感覚がつかまとうことは否めないからだ。教育といわずに観光と考えた方が、効果は同じでも間口ははるかに広がるのは間違いない。

力量のある先生によって構成された楽しい理科や環境教育の授業はしばしばあるが、エコツアーの要素はそういった授業と似通っている。授業はただ学ぶことを目的とし、エコツアーは学んで楽しむ事を目的とする、というだけの違いである。

予習と復習は、リンクを効果的にするために有効なテクニックである。

事前の知識や経験が少ない場合、ツアーの前にレクチャーの時間をとり、図や写真を活用して基本的なことがらについて具体的なイメージを作っておく。これを伏線として張っておくわけだ。

そして、フィールドに出てから、予習しておいた基礎知識に出現する事象を関連付けてゆく。事前に自分の中に培われたものほどではないにせよ、このような仕掛けを作っておくことで、訪問客と屋久島との距離を近づけ、屋久島という世界のイメージを広げる手助けにすることができるだろう。

しかしこれは単にわかったような気にさせるという小手先のテクニックに終わることも多い。繰り返すが、本質的なものは、あくまでその人の内部で熟成してきたものごとへのリンクである。

### 《 インタープリテーションの語り(トーク) 》

語り口はガイドの最も重要な技術である。経験が浅く、プログラムをなんとなく覚えて語ろうとしているうちは、どうしてもセリフを正しく話そうとするあまり、これまた録音テープのような語りを聞かせてしまうことになりやすい。しかし説明を読むだけなら、セルフガイドブックで充分なのだ。

ガイドに必要なのは、なによりも専門的説得力であり、鋭く愛に満ちたまなざしであり、自然に対してこよなき知的好奇心を持ち続ける人間としての姿勢を訪問客に示すことである。インタープリテーションは感情の温度の高低に関わらず、自分のハートから出た言葉でなくては効果が薄い。

言葉の効果を狙う仕事である以上、日本語は洗練されていなければならない。インタープリターとして、豊富なボキャブラリーの中から最も適切な語をすかさず繰り出す能力は不可欠である。言葉への感度が鈍いものは、適性を欠くことになるかもしれない。

ニュアンスを伝えやすい表現として、比喩・隠喩・たとえばなしなどの技法があるが、いずれにしてもその物事をずばりいいあらわす表現を使う。そういえば初期YNACでは、日常会話でもなにかといかにうまい表現を繰り出すか競い合っていた記憶がある。

多くの言葉を費やせばいいな解説かという、そうでもない。むしろ最小限の言葉数で、豊かな意味を含む言葉を放つべきである。言葉を選び、シェイプアップする。解説の中の切り詰められる言葉はカットしなければならない。むだな言葉は、ゲストが屋久島に滞在できる時間を、邪魔するものでしかない。

またトークに否定的な言葉、悪い言葉、品のない言葉は基本的に使ってはいけない。その言葉の意味が解説に必要な場合も、他の言葉を使ってうまく言い換えるべきだ。地域による文化の違いに気付かなかつたりして、相手を引かせてしまつては減点である。

なお決まり文句や鮮度の落ちた野暮ったい言葉は相手をしらけさせるので、特に狙いがあるのでなければ使うべきでない。

### 《 質問について 》

理想的なインタープリテーションとは、結局のところゲストとの間に対話が成立している、ということである。うまく質問を引き出せる「呼吸」を作れると、ガイド側の気分も盛り上がる。

質問は対話の重要な要素であり、絶好の切り口になるので、逃してはならない。まずその問いをとりあげ、みんなで共有する。その上で必ず全体が納得ゆくまで応えなければならない。答えに窮してはぐらかすなど論外というよりはもったいな過ぎる。また質問がなければそれは一方通行の解説になっている可能性もある。

質問に答えているうちにその質問者と個人的に話し込んだり、おしゃべりに夢中になっていたりすることがある。これはその他の参加者に疎外感を感じさせてしまうので、個人的な問題は別として、話題は原則として全員で共有するべきだ。

このような共有の楽しみを可能にするためには、ツアーパーティーの共同意識を自然に作る必要があるだろう。ガイドがお客さんを何人かまとめて案内する、ではなく、一日みんなでの森の自然を楽しみに行く、という空気である。

ただし雰囲気盛り上げようと、予定調和的に団結を作ったり、ガイドが妙にハイテンションにふるまったりすると、ゲストをしらけさせ、ツアーに距離を置かせてしまうことになる可能性があるの注意がある。ある種のクールさも必要なのだ。

質問は何が出るかわからないが、フィールドワーカーが普段経験していることを大きくはみ出た質問はあまりないので、日頃さまざまなことがらに探究心を持って活動していれば、おおむねカバーできる。解説そのものに関連して、さまざまな事象の因果関係を科学的な態度で広くできるだけ深く調べておくことである。

そもそもガイドは物知りでなければ話にならない。少なくとも、さまざまな事象に関して、今どのくらいわかっているかを把握しておくことはガイドとして重要なスキルであり、自分が知らないことと、まだ科学的に調べられていないことの区別もきちんとしなければならぬ。最近よくある「科学的迷信」のたぐいは、よく研究しておく、笑い話のネタになるが、下手をするとそれを信じていたゲストを傷つけてしまうこともある。ユーモアが必要だ。

### 《 解説のレベル 》

解説は基本的なことだけで充分、という意見を聞いたことがある。これはプログラムに関してはある程度正しいかもしれない。実際初めて自然に触れる機会を持ったゲストには、大量の知識を流し

込んでも消化不良を起こす可能性が高い。しかし、初心者しか納得させられない、というレベルの仕事のことを一般に子供だましという。プロの仕事なら、初心者に対しても専門家に対しても、心地よく説得力のあるものが要求される。

なお、知識が現場に追いつかないうちにはありがちなことだが、根拠もなく自分の思い付きをしゃべってしまうことは、厳にいましめなければならない。よほどのゲストでなければガイドのトークに対する批評力は持たないため、ガイドの話すことはそのまま真実とされてしまうからである。

「口からでまかせ」は、いまやネットに乗ってどこまでも拡がってゆく。さらに恐ろしいのは、何度も語っているうちに、自分のでまかせを自分で信じてしまうことである。

### 《 アウトドアアクティビティとインタープリテーション 》

YNACのIEツアーでは、各メニューそれぞれのアウトドアアクティビティとインタープリテーションとの比重が異なる。沢登りやシーカヤックなどアクティビティが主な場合は、行動中のインタープリテーションは簡潔で量も少なくなるし、反対に博物館をぶらぶら歩くようにじっくり道草を食うタイプのツアーなら、体力を使うことも少ないかもしれない。アクティビティは体を使う喜び、インタープリテーションは脳を使う喜び、と分けて、効果的なバランスを見出す必要がある。ゲストは屋久島の自然を楽しみに来たのだ。アウトドアアクティビティとインタープリテーションも、そのための効果的な手法ではあるが、過剰な干渉はいらんおせっかいにすぎない。適切なバランスがなにより大切だ。

### 《 最後に 》

初夏の屋久島、照葉樹林の森は一変する。春からいい間隔で暖かい雨が山を湿し、一雨ごとに新緑が山を塗り替えてゆく。

何十種という樹木が思い思いに衣替えを楽しんでいるかのようだ。もうじきやってくる梅雨期の激しい雨と、奇烈な夏の日差し、そして襲い掛かる台風の暴風に備えるため、照葉樹林の樹木群はこの初々しい若葉を、世界で最もタフな葉に育て上げなくてはならない。それは性急な活気に満ちた風景なのである。

屋久島でこの風景を前にして、いったい何の言葉の必要があるだろうか。なにも知らなくてもいい、あるがままの姿に静かに耳を澄まし、なにかを感じとることができれば、それが最上のことだ。このようながめを前に、我々にできることなど実は多くないかもしれない。

でも、人としてその日のメンバー全員が響きあうことのできた一日、というものもまれにだが存在する。それはガイド冥利に尽きる素晴らしい経験である。我々の言葉がだれかの広い世界を切り開く最初のきっかけになるかもしれない。そうあって欲しい。





## Calendar・2007~2008

- 11/21 松本 サンゴ調査 「志戸子・元浦」  
 11/25 ダイビングクラブ 「栗生」  
 12/5~6 松本・高橋 サンゴ調査 実習受け入れ  
 12/7 みのもんだ「おもいっきりイ!テレビ」の「今日は何の日」コーナーに、内室登場 1993年のこの日に世界遺産に登録された屋久島を紹介しました  
 12/17 JES(日本エコツーリズム協会)ガイド部会・会合 松本が初代ガイド部長に就任  
 12/18 松本 岩手県八幡平エコツアーガイド養成セミナー 講師  
 12/21 松本 東京都小笠原エコツアーガイド勉強会 アドバイザー  
 12/24~26 岡山理科大学 屋久島実習受け入れ  
 1/3 退職した古賀早苗に長女・水綾(みあや)誕生 おめでとう!  
 1/9~26 松本・小原・高橋・内室・佐藤・小林 種子島で普通自動車2種免許を取得  
 1/29 松本 国際サンゴ礁年 東京サンゴカフェ ゲストとして参加  
 1/31~2/1 白谷雲水峡で遭難者がでる 市川・内室・櫻村が捜索に参加 4日目に無事保護される  
 2/3 佐世保市役所観光課 屋久島研修受け入れ  
 2/7~12 市川 風の旅行社主催 プルネイツアー 講師  
 2/13 桜島まるごと博物館構想勉強会 講師  
 2/19~20 瀬戸内町役場 屋久島研修受け入れ  
 2/25 長谷川りえ 退職  
 3/1~5 岡山理科大学 ダイビング講習  
 3/6~10 松本 JES(日本エコツーリズム協会)主催 目黒エコツアーガイド養成セミナー 講師  
 3/20 NHKスペシャル「エコ大紀行」に佐藤登場 安房川でのリバーカヤックを紹介しました  
 3/29 野外活動研究所(IOE) 屋久島ツアー受け入れ  
 4/1 市川洸介 小原萌衣 晴れて大学生に そして、市川颯太は高校生 小原漢太は中学生に  
 4/1 「屋久島山岳部保全募金」が始まる  
 4/11 朝日旅行会 屋久島ツアー受け入れ  
 4/11 松本 日本スポーツ協会スキューバダイビング安全講習会 参加  
 4/19 松本・高橋 屋久島海祭り 海岸清掃と第1回春田浜サンゴの健康診断(コーラルウォッチ) ~「国際サンゴ礁年」の今年は、屋久島でもサンゴについて色々取り組みます~  
 5/17 松本 第2回春田浜サンゴの健康診断(コーラルウォッチ)  
 5/17~18 佐藤 第2回「ゼロからの大縦走」  
 5/18 松本 国際サンゴ礁年鹿児島実行委員会 桜島イベント実行委員長  
 5/21~25 風の旅行社 屋久島ツアー「原生林縦走」  
 5/25 高橋宏美退職 独立し、夫婦でダイビングショップをオープン 屋久島ダイビングステーション『まる』  
 → <http://maru-yakushima.net/>  
 5/31 市川 しゃくなげ登山 スタッフとして参加  
 6/4 松本 岐阜県立森林文化アカデミー 2時限の授業担当

## Library

### 「屋久島ブック'08」山と溪谷社(小原・内室・佐藤)

毎年、本作りのお手伝いをさせて頂いている屋久島ブック。今年はYNAC登場しまくります。屋久島本の紹介で、小原が洗いチョイスの書籍を紹介。エコツアー特集ページで内室がリバーカヤックを担当。ワコールの広告にも登場します(好日山荘では、ポスターになっています)。佐藤はフェニックスの広告をお手伝い。そしてなんと、最終ページにどどーん!とYNACの1ページ広告を掲載しました! YNAC割引クーポンもついできます。

### 「岳人別冊 春山2008」(小原)

「春山」ということで、初夏の花が咲き誇る黒味岳を紹介。山頂を目指すだけでなく、そこにいたるまでの過程を存分に楽しむ。小原の解説を聞きながら、屋久島についての、編集人、自らの気づきにふれられています。

## Contents

巻頭言	「エコとエゴ」	市川 聡 1
屋久島レポート	「屋久島の正月」	内室 紀子 2
	「ヤクシカを撃つ」	櫻村 精一 6
サンゴ礁年スペシャル	「サンゴの健康診断」	高橋 宏美 8
	「国際サンゴ礁年に思う」	松本 毅 9
つれづれエッセイ	「焚き火をしよう」	佐藤 崇之 11
	「インタープリテーションの技術」	小原 比呂志 13

### 「ヤマケイJOY 2008 春号」山と溪谷社(小原)

特別紀行 田口ランディ源流紀行「光の雨の森をゆく。屋久島」。花山原生林のスケールの大きさを表した、圧倒的な写真で雨降る森が紹介されています。ちなみにこの号は、過去にYNAC短期研修生として参加した立田由里子が、表紙を飾っています。

### 「地球環境 Vol.3 No.1/2008」(社)国際環境研究協会(市川)

「世界遺産登録後の屋久島の課題とエコツーリズムの現状」と題して論文を発表。世界遺産に登録されて15年たち、屋久島が抱える問題点も変化しています。こうした変化を踏まえ、屋久島のエコツーリズムが進むべき方向を提言しています。

### 「生態学からみた自然保護地域とその多様性保全」(市川共著)

#### 大澤雅彦監(財)日本自然保護協会編集 講談社サイエンティフィック

原生自然環境保全地域である花山原生林の事例を報告しています。花山広場に立てられて景観を著しく阻害する看板を糾弾しています。

### 「BE-PAL」小学館

ご存知、アウトドア雑誌最大手。「この島に魅了されると大変なことになる」と題して、屋久島特集が組まれました。エコツアー会社紹介でYNACは登場。そして、シェルパ斉藤さんの執筆ページに小原家も登場です。

## 編集後記

- ★今年で15周年を迎えました。パンフレットも一新し新たな気持ちで前へ進んでいきたいと思えます。(ま)
- ★ちりとてちんで上方落語にはまりました。インタープリテーションに枝雀が入っていたらご勘弁を。(い)
- ★「字が小さすぎて読みにくい」と苦情をいただきながら、思いのたけはあふれ続け、またもや字がぎざりの通信になってしまいました。言葉のシェイプアップは難しいものだなあ。(お)
- ★今後とも屋久島の海にてがんばりますので、上陸の際にはぜひお声をかけて下さい!(た)
- ★春からカメラ小僧になりました。(か)
- ★石油価格高騰! 屋久島のガソリン代も200円/ℓ目前です。物価も上がり、日本人の生活がいかに化石燃料に依存しているかが、良く分かります。(さ)
- ★昨冬で退職しました。が、屋久島を、そしてワイナックを好きな気持ちに変わりはありません。屋久島での全ての出会いが私の宝です。ありがとうございました!(は)
- ★10周年の時は、一番ペーペーだったはずなのに、気づけば古株。時の流れと共に、それぞれの生きてゆく道があるのだと、実感します。(う)

## YNAC通信(ワイナックつうしん) NO.25

発行日: 2008年7月1日

発行: (有)屋久島野外活動総合センター

住所: 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦368-21

TEL:0997-42-0944 FAX:0997-42-0945

E-MAIL:forest@ynac.com URL:http://www.ynac.com